

【新常識の最前線】

AI主権の正体

NECO-ASOVI構想

ついに全貌公開

Networked **ECO**system for **A**gentic AI **SO**vereign, In vitro
= エージェント型AI主権のためのネットワーク型エコシステム

【※AIが創る未来に興味がない人は見ないでください】

中谷一馬 | デジタルハリウッド大学大学院 特任教授

2026年6月28日(日) 21:00-

NECO-ASOVI構想

知能の「主権」を、再配置する。

中央集権型 AI の構造的限界を超える、自律分散型ネットワーク主権インフラの全体構想

Sovereign AI Infrastructure — 全集

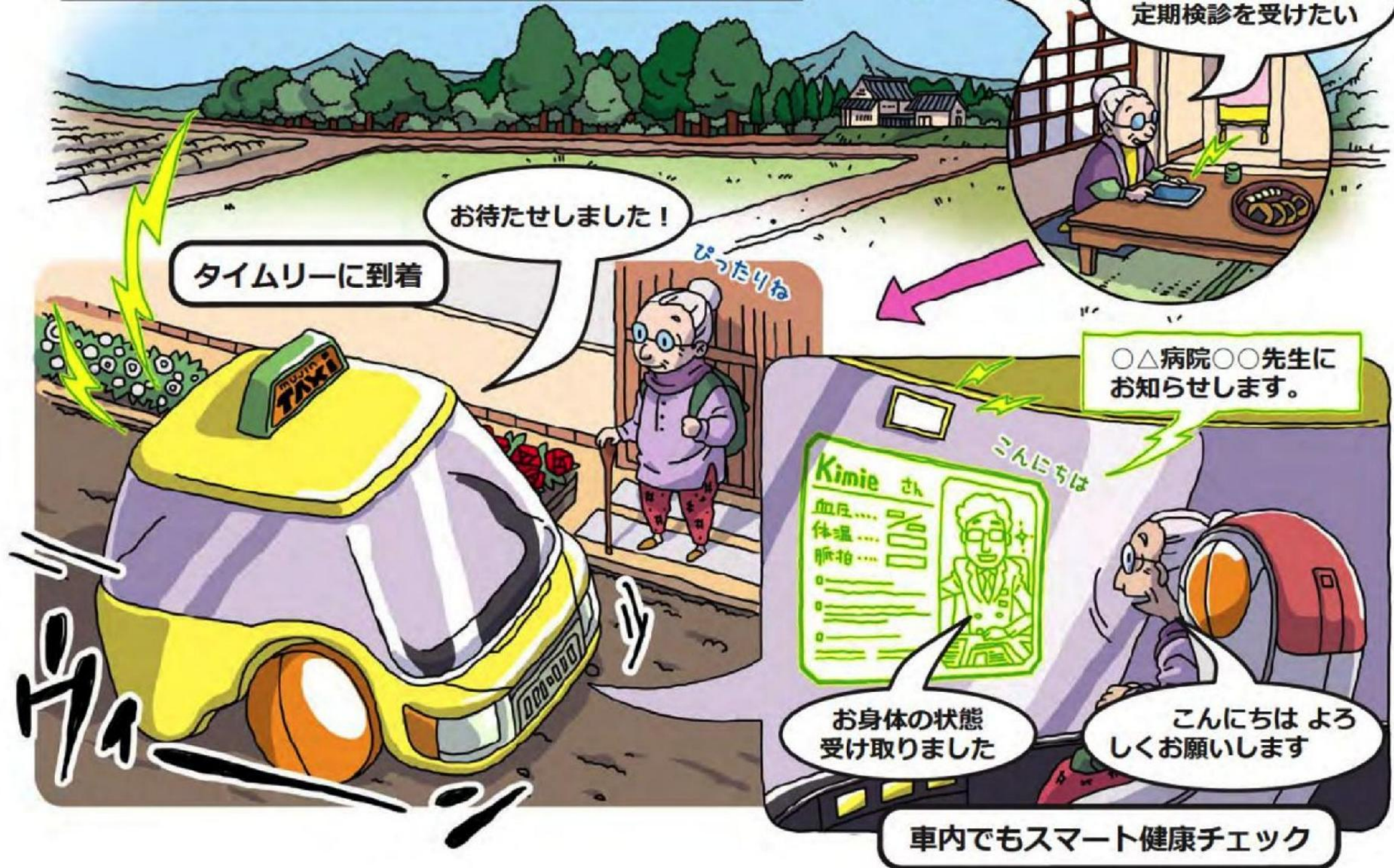


プロローグ

AIカンブリア爆発前夜。 世界平和を本気で取りに行く。

AI爆発で生まれる莫大なお金を、人々にダイレクトに流すソリューションを実装する。

皆様は、今から 10年後、2030年代は、
どんな社会になっていると思いますか？



定期検診を受けたい

お待たせしました!

タイムリーに到着

ぴったりね

〇△病院〇〇先生にお知らせします。

こんにちは

Kimie さん
血圧...
体温...
脈拍...
0
0
0
0

お身体の状態受け取りました

こんにちは よろしくお願いします

車内でもスマート健康チェック

自治体

どこでも手続



C コネクティッド

地域資源を集約・活用したコンパクト化と遠隔利用が可能なネットワーク化により、人口減でも繋がったコミュニティを維持し、新たな絆を創る「コネクティッド(連結)」の社会

24時間ネットで受付
忠実で有能な執事ロボが
お役所イメージを刷新

大災害が発生しても
ワイヤレス給電などで、
途絶えぬネットワークを維持

医療が24時間見守り、
病気は予防・早期発見で
治療も超進化

自動運転の空陸両用タクシー
が過疎地や高齢者の足となり
事故や渋滞も大幅解消

ARで好きな時代を再現
音や香りなども再現することで、
より感動的な体験に

健康医療

いつでもドクター



ツーリズム

時空メガネ



防災

あちこち電力



公共交通

クルマヒコキー



仕事のやり方が変わる①



52羽がB級卵か...
鶏舎を移す必要があるな

イメージセンサードローン



仕事のやり方が変わる②

ドローン測量

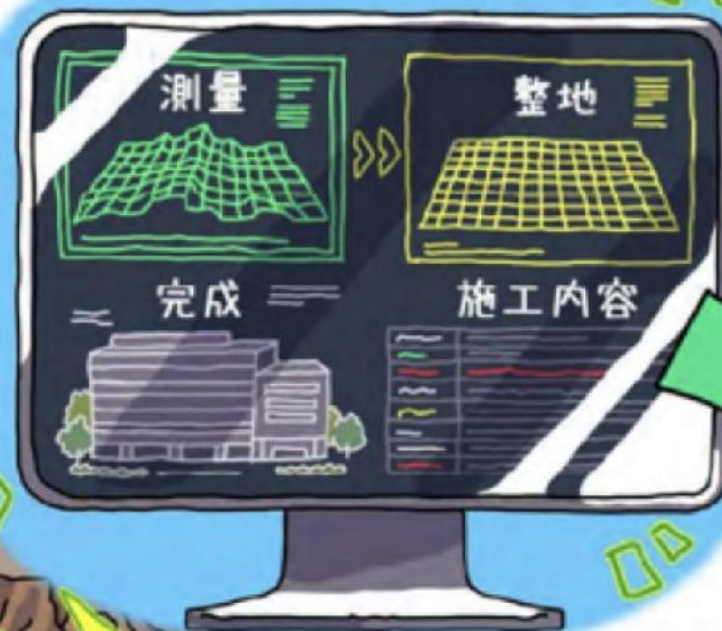
ドローン測量

カ
カ
カ

カ

ウ
ウ
ウ

無人



操作タブレット

リビングから
建設現場の建機をチェック



金融・決済 らくらくマネー

支払は完全キャッシュレス。購買履歴の作成や信用データの形成も自動化でき、家計管理・借入れや各種申合せにも簡単に活用。

T トランスフォーム

設計の変更を前提とした柔軟・即応のアプローチにより、技術革新や市場環境の変化に順応して発展する「トランスフォーム(変容)」の社会

買い物は完全キャッシュレス。購買履歴の作成や信用データの形成も自動化でき金融サービスが便利に

農業はロボット耕作、配達はドローンで自動化 人手不足・高齢化を解消

ドローンや自動運転の無人配送を自由に選び、暮らしに必要な買い物を楽々調達

データを買って 我が家の3Dプリンタで製造 匠の技も簡単に再現

家庭や有名レストランの味を AIが正確かつ高速で再現する 料理マシンが登場

流通・運輸 えらべる配達

配達ドローンが自宅の配達スポットに荷物をお届け。

ドローンが空から、ライドシェアの車が玄關に、スーパーが丸ごと近所に。色々な無人配送をネットで選べて、買い物難民も解消。

サービス業 三つ星マシン

メニューを選べばあとは料理マシンにお任せ

各地の素材を使いつつ、個人の健康状態も加味しながら、家庭や有名レストランの味をAIが正確かつ高速で再現。

一次産業 全自動農村

システム管理も遠隔地から可能。

農業は土地の集約化による大規模農園化。稲作などは完全自動化。全てIoT、ロボット、ドローンによる管理で製造される。

農業など地場のなりわいはIoT・ドローン・ロボットが担い、人手不足や高齢者の負担を解消。生産性も高まり、景観も維持。

ものづくり 手元にマイ工場

操作に不慣れな人も地域で助け合い。

ちょっとした日用品は自分で作れるように。コンビニの「モノ」から「データ」を売る時代に。

日用品や雑貨など、データを買って自分でプリント。日頃学んだプログラミングで世界に一つだけのデザインに加工。

サーバー

CLOUD

日本語で聞こえる

ここから1番近い地下鉄の駅はどこですか？

Excuse me. Where is the nearest subway station ?

英語で聞こえる

Go straight and this street, and make a left turn at the signal.

ロシア語で聞こえる

Всего пять минут пешком.

Спасибо

この通りを真っすぐ行って 信号を左に曲がるとあります。

歩いて5分くらいです。

日本語で聞こえる

ありがとう



働く人

職場スイッチ



1 インクルーシブ

年齢・性別・障害の有無・国籍・所得等に関わりなく、誰もが多様な価値観やライフスタイルを持ちつつ、豊かな人生を享受できる「インクルーシブ(包摂)」の社会

しごとと職業、働く場所や組織に囚われず、
多様な才能を発揮

人生100年、頭や身体
の衰えはハイテクでカバーし、
元気に活躍

読み・書き・デジタル、
世界の人材と戦う武器を
幼少期から装備

自分の選んだメニューで、
会議の内容を翻訳して
自在にコミュニケーション

ロボットも家族の一員、
人間とロボットが、会話や
生活サポートを通じ共生

子ども

パノラマ教室



ロボット

お節介ロボット



高齢者

健康100年ボディ

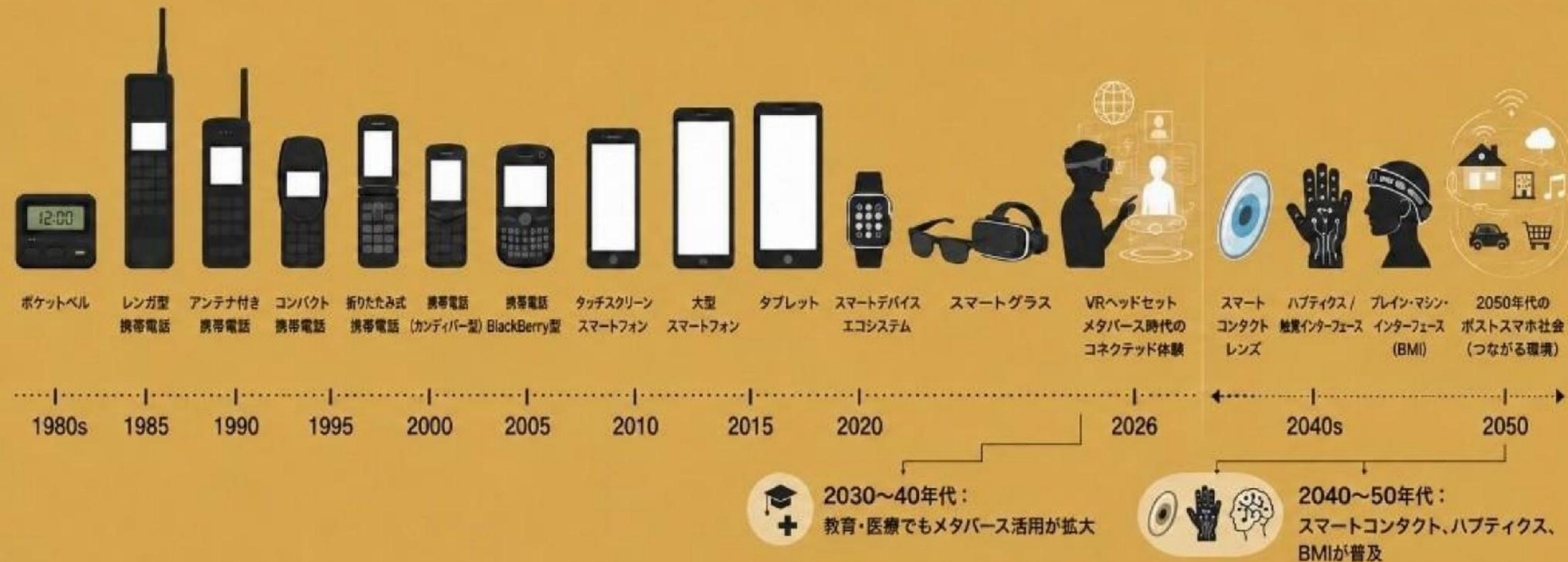


障害者

あらゆる翻訳



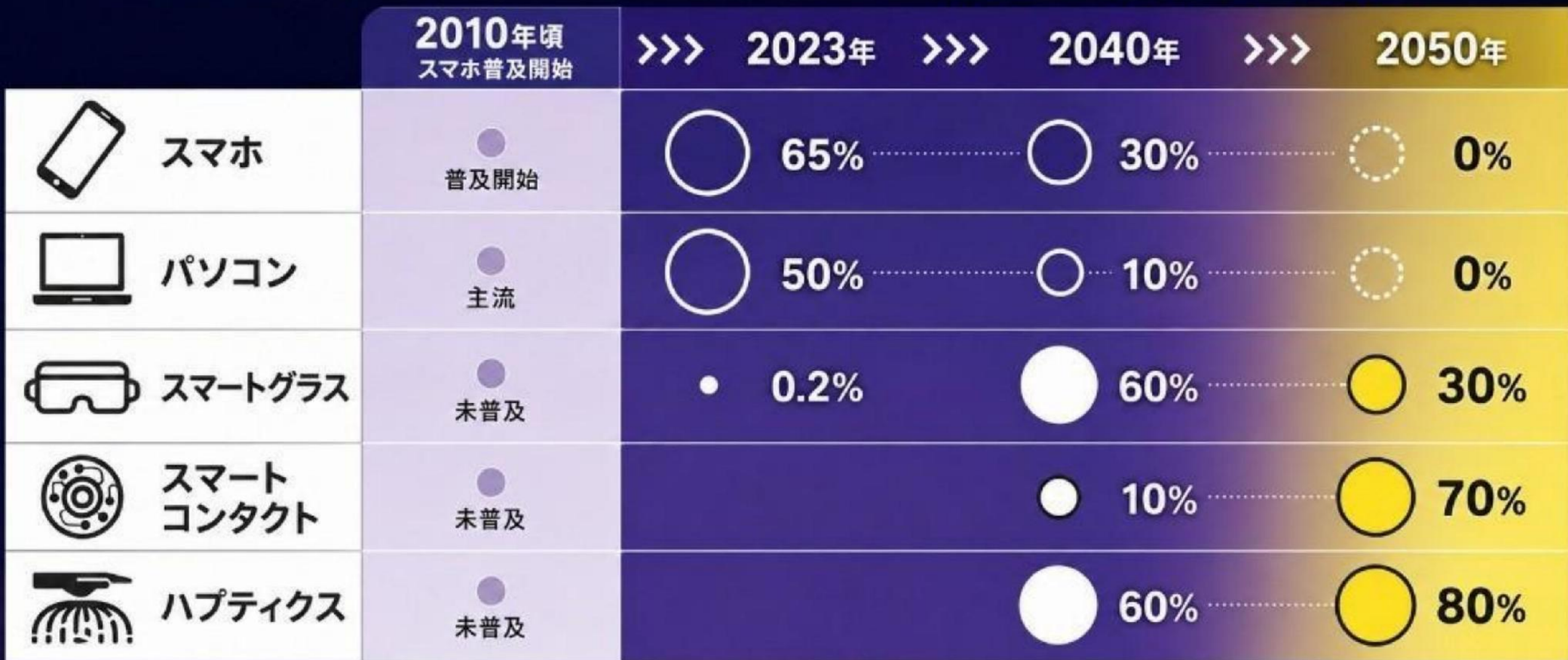
モバイルデバイスの進化



通信・処理能力は飛躍的に進化

端末は電話からスマートフォン、タブレット、xR、そして身体一体型インターフェースへ

2050年にはスマホがなくなり、新しい技術が普及



① 振動などで触覚を擬似的に再現するデジタル技術

※2010年頃はイメージ

モバイルデバイスの進化

通信・処理能力は飛躍的に進化し、端末は電話からスマートフォン、XR、そして身体一体型インターフェースへ

通信世代の進化

アナログ通信

1G

1980年代
音声通話が主役

デジタル通信の始まり

2G

1990年代
デジタル通話・SMS

モバイルインターネットの拡大

3G

2000年代前半
モバイルデータ通信

スマートフォンの普及と高速化

4G

2010年代
高速データ通信・アプリ拡大

超高速・大容量通信

5G

2020年代
超高速・低遅延・多数接続

5G Advanced / 6Gへ

6G

2030年代以降（想定）
超低遅延・超高信頼・非地上車連携

端末の進化

※年は主な発売・登場時期
(グローバル基準の代表例)

日本市場で重要なマイルストーン

未来のインターフェースへ
身体近接・環境融和・脳直結へ



UI/使い方の進化



現在地 (2020年代前半～中盤)

スマートフォンは世界の約70%が利用

5Gの拡大とAI活用の加速

ウェアラブル・XRが立ち上がり

新しいインターフェースの研究・実証段階

今後の見通し (2030年以降)

デバイスの多様化・共存

AIによる個別最適化

感覚・身体・脳への拡張

ポストスマホ社会へ

世界のユニークモバイルユーザー比率



約70% (2024～2025年)
(出典: DataReportal 2025)

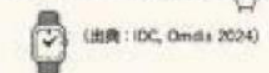
5G人口カバー率: 56%超 (2024年)

AI搭載スマホ・デバイスが増加



スマートウォッチ普及継続

XR/ARグラス市場が拡大



(出典: IDC, Omdia 2024)

スマートコンタクト、ハプティクス、BMIは研究・臨床・実証が進行中



(出典: 各種レポート 2024)

スマホ中心から、グラス・ウェアラブル・環境型へ



パーソナルAIが文脈を理解し、自然に支援



視覚・聴覚・触覚・脳へと人間の能力を拡張



単一端末ではなく、環境全体がインターフェースに



※年は代表的な商用化・発売時期を示す (普及期は前後する場合があります)

※未来は推測であり、確定した予測ではありません

■ 確立・普及済み ■ 普及・拡大期 ■ 立ち上がり・実用化初期 ■ 研究・実証段階 ■ 推測領域 (不確実性が高い)

コペルニクスの転回

コペルニクスが、天動説が主流の時期に地動説を唱えた時のように、物事の見方が180度変わってしまうことはいつの時代にも訪れます。

生成AIによる未来曼荼羅

2026 アップデート版

ベース図を再構成し、2026年時点で重要度が高まった論点を追加・更新。

環境中立と
経済成長の両立

超高齢化社会における
ウェルビーイング



ヒトと生成AIの協業によるビジネスモデル革新

参考：日立総研『生成AIの未来曼荼羅』をもとに再構成

生成AIの経済インパクトはどれほど大きいのか？

マッキンゼーは、生成AIが世界全体にもたらす年間経済価値を
2.6兆～4.4兆ドルと試算しています。

対象は世界全体・年間ベース。63のユースケース分析に基づく推計です。

生成AIの年間経済価値



2.6～4.4兆ドル

約416兆～704兆円（1ドル＝160円換算）

比較

日本の名目GDP

約4.38兆ドル

約701兆円（1ドル＝160円換算）



上限の4.4兆ドルは、日本の名目GDPにほぼ並ぶ規模です。

留意点（必ずご確認ください）



- 4.4兆ドルは上限値であり、固定値ではありません
- 推計は“生成AI単体”の世界全体の経済価値です
- 実際の効果は導入速度や活用範囲で変動します

ポイント



- 生成AIは企業の生産性向上と付加価値創出を後押し
- 規模感としては、日本経済に匹敵しうるインパクト



出所：McKinsey『The Economic Potential of Generative AI』（2023）、IMF DataMapper（Japan GDP, current prices, 2026）

国家が、最先端 AIを止めた。 「使えること」は、当たり前ではなかった。

Anthropic「Fable 5 / Mythos 5」—— 6月9日に公開、6月12日に米政府の輸出管理指令、わずか 3日で全ユーザー停止。
(他のClaudeモデルは影響なし／復旧は不透明)

AIは「便利なサービス」から「戦略物資」へ

これまで

便利なクラウドサービス

いつでも、好きなだけ使える前提。

- APIでいつでも接続できる
- グローバルに提供される
- 価格も提供も安定という前提



これから

国家が管理する戦略物資

電気・石油・半導体と同じ戦略の対象。

- 安全保障を理由に供給が止まり得る
- 同盟国でも、例外ではない
- 民間サービスでも制限され得る

※同盟国であっても、安全保障が優先されれば AIは止まり得る——その現実認識です。



序章 — 新しいベンダーリスク

「止まる」リスクは、数多ある

- 政府指令による突然の停止（輸出管理・安全保障）
- 規約変更による利用制限
- API価格の急騰
- モデル変更による業務品質の劣化
- データ・ログ・実務知の囲い込み
- 地政学リスクによる利用制限

これは、AI時代の新しいサプライチェーンリスクである。



序章 — AI調達ポートフォリオ

「単一依存」から「ポートフォリオ戦略」へ

- **米国AI** (OpenAI / Anthropic / Google) — 高性能。ただし米国一極依存のリスク
- **欧州AI** (Mistral など) — 米国からの遮断に備えた代替候補
- **オープンモデル** (Llama系・各種OSS) — 自社運用・オンプレミスの選択肢
- **中国AI** (DeepSeek / Alibaba 等) — 機密不要の用途に限定し、データリスクを慎重に評価
- **日本独自AI** — 安全保障・公共・重要産業向けに育成

問いは「どれが最強か」ではない。「止まらない業務基盤をどう設計するか」。

「モデルを使えること」と「主権を持つこと」は違う

特定モデルへの依存

止まれば、仕事も止まる

国家・規約・価格・輸出管理に左右される。

- API停止・規約変更・値上げ
- 実務知がベンダー側に残る
- 主権はこちらにない

VS

NECO-ASOVI

モデルではなく、土壌

知識・実務・信頼・収益権が手元に残る。

- 複数モデルを交換可能にする
- 知識はCubeとして外部化
- 信頼と収益権をネットワークで流通

モデルを使えても、主権がなければ止められる。だから私たちは、AIが発生する“土壌”を取りに行く。

構想の核 — 7幕構成

プロローグ

はじめに

第1幕

世界平和に対する本気。

第2幕

本当の脅威 — AIカンブリア爆発

第3幕

中核概念 — 発生器はエコシステム

第4幕

AI収益権の大衆分散装置

第5幕

なぜ私か — 個人史とやりきれなかった想い

第6幕

NECO-ASOVI と、貧困 → 暴力動機の希薄化

第7幕

決意と依頼

第 幕

1

この際、マジで取りに行く。

俺の世界平和に対する本気。

政治で実現すべき未来が あるからこそ

私は、政治で実現すべき未来があるからこそ、今このタイミングで、
AIの新しい時代に対して、社会実装の側から起案しなければならないと思っています。

本資料の構成

出発点(課題)から 7 つの設計原理を章・節単位で詳説し、自律的エコシステムと社会実装、国家レベルの実装、 2 つの応用領域、そして到達点までを順に辿る、本書全体を網羅した構成である。





「知能の内部化」—— 中央集権型 AI の独占構造

- LLM の発展は人類史の転換点となり、専門知識や経験を要した作業が、適切なプロンプトを入力するだけで瞬時に自動化されるようになった。
- しかし華やかな表層の裏で、ごく一握りの巨大テック企業による基盤技術のブラックボックス化と市場の寡占が進行している。
- 最新鋭モデルの内部構造や学習データは企業秘密として囲い込まれ、人類の共有財産となるべき知識や推論ロジックが単一企業のモデル内部へと閉じ込められる。
- この「知能の内部化」とも呼ぶべき独占構造が、エンドユーザーと社会全体を極めて脆弱な立場へと追いやっている。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

いまのAIは「中身の見えない箱」を、数社が独占している

- ChatGPTのような便利なAIは、ほんの数社の大企業がつくっていて、学習データや仕組みは企業秘密＝「ブラックボックス」になっている。
- 本来みんなの共有財産になるべき知識や考え方が、1社のAIの中に閉じこめられてしまう。これを「知能の内部化」と呼ぶ。
- 大事な決まりや仕事を「中が見えない大きな存在」に丸ごと任せると、利用者も社会もとても弱い立場に追いやられる。



出発点 ② / THE PROBLEM



ロックイン・プラットフォーム支配・実務知の揮発性



ベンダーロックイン

API 経由の従量課金に依存し、
推論コストは指数関数的に増大。
離脱の自由がない。



プラットフォーム支配

審査・手数料(売上の数十%)・
ポリシーが密室で決まり、
開発者は「従うか、去るか」の
二択を迫られる。



実務知の揮発性

育てた業務知識は非構造的な
プロンプトにとどまり、仕様変更や終了
で一瞬にして無効化される。

問題の核心 — 主権の不在

知能・信頼・価値分配という中核機能が、企業のブラックボックスに集中している。ユーザーは知的資産の所有権も、サービスの継続性も、自らの手に持てない。この構造そのものを書き換えることが、本構想の出発点である。

到達点 / THE GOAL

主権の再配置を実現する「三つの移行」

巨大 IT 企業が独占してきた「知識の源泉」「信頼の流通基盤」「価値の分配機構」を、ネットワークの側へ組み替える。
次の三つが同時に進行して初めて、主権の再配置は現実のものとなる。



移行 1

信頼の根源

企業ブランドから
暗号学的な検証可能性へ



移行 2

知能の所在

モデル内部から
ユーザー側の外部トポロジーへ



移行 3

主導権

モデル所有者から
ワークフロー育成者へ

核となる価値命題 — 信頼の民主化 (Trust Democratized) :

信頼のよりどころを、企業の善意ではなく暗号学的な検証可能性そのものへ移す。

規制の強弱を超えて、信頼そのものを設計する

- AI政策の核心は「規制を強めるか緩めるか」ではなく、信頼そのものを設計することにある——これはNECO-ASOVIの「信頼の民主化」と核を同じくする。
- 問題が起きてから対処するのではなく、設計段階からリスク制御・監査可能性を組み込む「セキュリティ・バイ・デザイン」の発想が前提となる。
- 系譜ログ・Proof of Malfeasance・時刻の主権は、この発想を最初から実装したものである。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

大事なのは「規制を強める／緩める」より、最初から信頼を設計すること

- 問題が起きてから直すのではなく、つくる段階から「ずるができない・あとで検証できる」仕組みを組み込む（セキュリティ・バイ・デザイン）。
- 系譜ログ（だれが作り育てたかの記録）、Proof of Malfeasance（ずるをすると自分の署名で証拠が残る）、時刻の主権（みんなの時計をそろえる）が、その実装例。
- NECO-ASOVI構想ではこの発想を「信頼の民主化」と呼んでいる。

第 幕

2

本当の脅威 — AIカンブリア爆発

DeepSeekショック。Mythosのサイバー危機。—
あれは本番ではない。序章です。

DeepSeekショックも Mythosのサイバー危機も、
2023年にはわかってたこと。

本当の脅威

AI駆動型サイバー攻撃は、もはや誇張ではない

- 2025年11月、AIが攻撃プロセスの大半を自律的に遂行した世界初の大規模サイバースパイ活動が検知・阻止された。
- 2026年4月には、最新モデルMythosが未知の脆弱性を大量に自律発見する能力ゆえに、一般公開そのものが見送られた。
- 攻撃側が先にAIの力を握れば、従来の防御態勢は通用しない。
- 中央集権のブラックボックスに防御を依存する構造こそが、最大の脆弱性である。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

AIを使ったサイバー攻撃は、もう「大げさな話」ではない

- 2025年11月、攻撃の大半をAIが自分で進めた、世界初の大規模サイバースパイ活動が見つかり、止められた。
- 2026年4月には、未知の弱点を大量に自動で見つける能力ゆえに、最新モデルMythosの一般公開そのものが見送られた。
- 攻撃側が先にAIの力を握ると、これまでの守り方は通用しない。
- 中央の「見えない箱」に守りを頼る構造こそが、最大の弱点である。

単体から、群へ。そして「発生する」生態系へ。

Phase 1

単体AI

人間が作る。個別のモデルを設計し、人手で構築・運用するフェーズ。

Phase 2

AI群

連携・拡張。複数のAIが結びつき、互いを補完しながら能力を拡張するフェーズ。

Phase 3

自己増殖する AI生態系

発生する。AIがAIを生み、土壌の上で自律的に増殖・進化していくフェーズ。

Mythos は『作られた』もの。
これからの AIは『発生する』。

『発生器』は『エコシステム』 と呼ばれている。

本当に取られてはいけないのは、AIそのものではない。AIが発生する畑、AIが育つ土壌。

ここでの「エコシステム」は "仕組み" ではなく "生態系"。

作る人がいなくても、勝手にAIが生えてくる空間のことです。

"作りやすくする"話ではありません。"作り手ゼロで、勝手に生まれ出る"——

これがエコシステムです。



「エコシステム」は“仕組み”ではない。 それは“生態系”のことだ。

× よくある誤解

「エコノミーなシステム」—— みんなが、より低コストに、何かを“作りやすくする”仕組み・環境のこと。

※ もはやこの意味でも通用するが、語源からは明らかに誤った理解。

○ 本来の意味（生態系）

「作りやすく」「低コスト」「仕組み」の“対極”。そこには作り手も、コントロールも存在しない。ただ“在る”だけで、誰も作らずとも、AIが勝手に“生えてくる”—— そういう空間であり、相互作用そのもの。

腑に落ちていただきたい着地点 —— 「作る人はゼロ。なのにAIは勝手に生まれ出る。生まれた無数のAIが稼ぐ仕組みも、その富がみんなに配られるメカニズムも —— 丸ごと全部、最初から組み込まれている。」

本当の意味で国防的に 1000倍ヤバくなるのは、
AI生態系を他国に握られちゃった時。

「モデルを作る」のか、「エコシステムを作る」のか。

「モデルを作る」ソブリン AI

単体のAIモデルを国産化する

モデル単位で技術的自立を目指すアプローチ。

- 特定のAIモデルを開発
- 技術的な自立を目指す
- モデル単位での管理

VS

「エコシステムを作る」ソブリン AI

AIが発生する土壌を握る

発生環境そのものの主導権を握るアプローチ。

- AI生態系全体を構築
- 発生環境の主導権を握る
- エコシステムレベルの管理

国家戦略の転換と符合する「エコシステム主権」

- 競争の核心は、もはや「どのモデルを国産で持つか」にはない。国家戦略の水準においてさえ、AI主権の問いは「基盤モデルの保有」から「スタック全体・運用・交渉力をどう握るか」へと移りつつある。
- NECO-ASOVIが提起する「エコシステムを作るソブリンAI」は、この転換を、国家の枠の外側——個人とネットワークの側——から先回りして実装するものである。
- 「モデルを作る」発想は特定モデルの優劣に主権を縛られるが、「土壌を握る」発想は、AIが発生する環境そのものの主導権を確保する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

競争の核心は「国産モデルを持つこと」から「土壌を握ること」へ

- もはや「どのAIモデルを自前で持つか」だけが勝負ではない。仕組み全体・運用・交渉力をどう握るかが問われている。
- NECO-ASOVIの「エコシステムを作るソブリンAI」は、国の枠の外側＝個人とネットワークの側から、先回りして実装する試み。
- 「モデルを作る」とそのモデルの良し悪しに主権が縛られるが、「土壌（AIが育つ環境）を握る」と主導権そのものを確保できる。



この夢物語は、もう 「構想」 ではない。
実現可能な 「設計」 に、達している。

夢物語



構想



設計 — 2025年末 到達

これからお話しする「7つの設計原理」は、正直に申し上げて、この場で一度にご理解いただくには難しすぎます。
ですので今日は、ひとつだけ感じ取っていただければ十分です。

—— 2025年末の時点で、本質的に実現可能な 「設計」 の段階にまで到達している。
その **手応え** だけ、今日は持ち帰ってください。

中身は回を分けて、最終的にはすべてご説明します。今日は、その入口まで。

7つの設計原理

1



LLM の相対化と知能の外部化 (Large Language Models)

LLM を言語処理エネルギーと再定義し、
知能を型付き階層 DAG として外部化

2



OS on OS (Operating System on Operating System)

ホスト OS 上に自律仮想 OS を展開。
ブラウザの牢獄を突破し PC を居住空間に

3



GMR と差分限定推論 (Graph-Memorized Reasoning)

確定済みの判断経路をメモ化し差分
のみ再計算。コストが単調減少

4



知能の暗号化カプセル Cube

知能を固化し暗号化。所有権を保ったま
ま流通・自己増殖する知能カプセル

5



P2P と堅牢な基盤 (Peer to Peer)

中央サーバ不在のメッシュ。時刻の主権
と Proof of Malfeasance で自律防衛

6



信頼の鎖と eKYC (electronic Know Your Customer)

実名バインドと市民権の階層化。
責任ある公共圏を分散的に構築

7



AI 収益権と二次投票

AI が生む富を大衆へ還元し、
熱意を計量する民主的意思決定

各原理は相互に補完し、
一つのインフラへ収束する

1

第一の設計原理

LLM (Large Language Models) の相対化と知能の外部化

LLM を交換可能な「言語処理エネルギー」へ押し下げ、業務知識をモデルの外側に構造として蓄積する。

型付き階層 DAG

Input/Output Schema

再帰的合成

モデル非依存





型付き階層 DAG ベースのトポロジー・ネットワーク

- 業務知識や意思決定プロセスを、モデル内部のパラメータではなく、その外側に「型付き階層 DAG（有向非巡回グラフ）」として構築する。
- 各ノードは厳密に定義された入力スキーマ（Input Schema）と出力スキーマ（Output Schema）で接続され、形式的に合成される。
- 要約・翻訳・分類・抽出などの低レイヤーの単純タスクから、高レイヤーの複雑な業務フローまで、再帰的に合成可能。
- ノード間のエッジには参照頻度・重要度・最近性に応じた重みが付与され、知識構造そのものが資産として蓄積される。

意義：特定モデルへの依存性が構造的に解消される。モデルが入れ替わっても知的資産は永続化し、外部化されたトポロジーはモデル所有者からワークフロー育成者の手へと移行する（第二の移行）。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

知識をAIの中ではなく「ネットワークの外の地図」に育てる

- 仕事や判断を小さなブロックに分け、矢印でつないだ「仕事の地図」にする。前に進むだけ・ぐるぐるしない形を「DAG」と呼ぶ。
- 各ブロックは「入れるもの／出てくるもの」の形（型）をきちんと決めるので、安全に組み合わせられる。
小さな地図を重ねて大きな地図にする＝「型付き階層DAG」。
- よく使う道は太く、使わない道は細くなり、知識そのものが財産として貯まっていく。
- こうしておけば、AIモデルが入れ替わっても知的資産は消えない。



なぜ外部化か ― RAG の限界と人間インターフェースの解消

- ― RAG（検索拡張生成）は知識を外部の文書として保存・検索するが、意味や重要度が時間とともに変わる「概念ドリフト」に弱く、単なる構造化された保存庫にとどまる。
- ― 現状、複数の SaaS（メール・表計算・社内システム等）は互いに隔離されたサイロで稼働し、人間が記憶と注意力でそれらを橋渡しする「人間インターフェース」になっている。
- ― NECO-ASOVI は知識を「文書」ではなく実行可能なトポロジーとして外部化し、本来システム同士が連携すべき場所をシステムに引き受けさせる。
- ― LLM を「知能の源泉」から、交換可能なインフラ層である「言語処理エネルギー」へと押し下げる。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

なぜ「文書として保存」では足りないのか

- ― RAG（検索拡張生成）は知識を文書として切って保存・検索するだけ。「どの順でやるか」「いつやり方を変えるか」という仕事の流れは残せない。
- ― 言葉の意味は時間で変わる（例:「今月のおすすめ」）。RAGはこの変化が苦手。
- ― いまはメール・表計算・社内システムがバラバラで、人間が記憶と注意でつないでいる＝「人間がインターフェース」になっている。
- ― ねこあそびは知識を「動くトポロジー」として外に出し、AI(LLM)を“知識のかたまり”から、交換できる「言語処理エネルギー＝電気」へ位置づけ直す。

2

第二の設計原理

OS on OS (Operating System on Operating System) とブラウザの牢獄からの解放



ホスト OS の上に自律的な仮想 OS を展開し、ブラウザのサンドボックスを突破。
PC を「自律エージェントの居住空間」に変える。

マルチプロセス仮想レイヤー

トロイの木馬戦略

オムニプレゼンス

自発性 AI



ブラウザの牢獄からの解放と統合仮想レイヤー

- Web アプリはブラウザのサンドボックスに閉じ込められ、ローカル資源への直接アクセスが厳しく制限されてきた。
- NECO-ASOVI はネイティブバイナリとしてホスト OS (Windows / macOS / Linux) 上に直接展開される、マルチプロセス・アーキテクチャの自律仮想 OS。
- REST API・WebSocket・Server-Sent Events を内包し、ファイル・I/O・プロセス間通信・アクセシビリティ権限を統合的に扱う。
- AI が「テキストを返す存在」から、人間と同じ画面操作で現実の業務フローを動かす「実行主体」へと進化する（単なる RPA とは異なる横断的編成）。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

ブラウザという「牢獄」から出て、パソコン全体を動かす

- いまのWebアプリはブラウザの中に閉じこめられ、パソコンのファイルや他アプリに自由にさわれない＝「ブラウザの牢獄」。
- ねこあそびは、OSの上にもう一つAI用OSをのせる「OS on OS」。メール・Excel・Slack・ファイルを横ぐしで動かせる。
- AIが「文字を返すだけの存在」から、人と同じように画面を操作して実際の仕事を進める「実行する主体」へ進化する。



主権の再配置とオムニプレゼンス・自発性 AI

- 戦略の核心は、広告で一時的に注意を奪うのではなく、日々使われる実用インフラとして PC に常駐し、継続的なコミュニケーション・パスを確保すること。
- このパスの確保はあくまで手段であり、目的は「主権の再配置」そのものにある。
- オムニプレゼンス（偏在性）：チャット・メール・音声通話など外部チャネルと連携し、自分の環境を中核に据えたまま、どこからでもアクセスできる。
- 自発性 AI：業務パターン・書式・判断の癖を学習し、自ら改善を提案し、必要なモジュールをネットワークから補完する「先回りする」存在へ。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

まず「便利な音声入力アプリ」のふりで広め、どこからでも使えるAIへ

- 広告で一瞬注目させるのではなく、毎日使う実用ツールとしてPCに常駐し、つながり続ける。目的は「主権の再配置」。
- オムニプレゼンス＝チャット・メール・電話など、どこからでも自分のAIにアクセスできる「いつでもどこにでもいる」状態。
- 自発性AI＝あなたのやり方や書式のクセを学び、自分から改善を提案し、足りない機能をネットワークから補ってくる「先回りする」存在に。

3

第三の設計原理

GMR (Graph-Memorized Reasoning) と差分限定推論

確定済みの判断経路を「メモ化」し、差分 (Δ グラフ) のみを再計算する。生物の神経回路網に倣い、知識基盤を「生きた」状態に保つ。

決定済み部分グラフ

Δ グラフ / 差分限定推論

コストの単調減少

忘却と再活性化

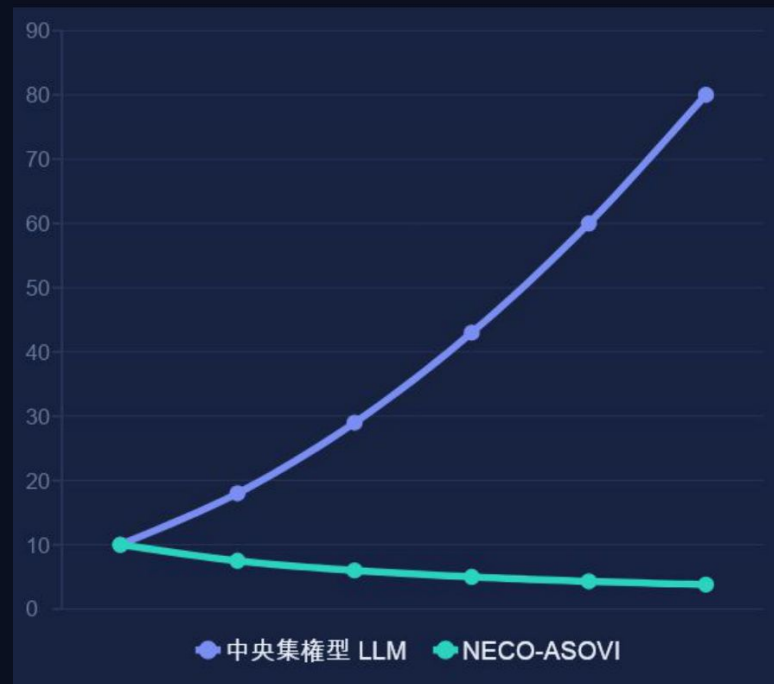


決定済み部分グラフと差分限定推論

- GMR (Graph-Memorized Reasoning) : 実行済みワークフローを「決定済み部分グラフ」として永続化 (メモ化) する。
- 新規タスクでは既存トポロジとの差分 (Δ グラフ) のみを抽出・再計算する —— 差分限定推論 (delta-constrained inference) 。
- 「すでに確定した判断経路を再計算しない」という原理に基づく。

効果 —— スケーリング則の反転：中央集権型の巨大モデルが成長とともに推論コストを単調増加させるのに対し、本構想は単位成長あたりの推論コストが単調減少する。

成長に対する推論コストの推移 (概念図)



← 利用・知識の蓄積 (成長) →

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

一度考えたことは「使いまわす」。だから使うほど安くなる

- GMR=前にやった仕事の地図を覚えておき、新しい仕事では「ちがう部分(差分)」だけをAIに考えさせる。
- 同じ部分は前の答えをそのまま再利用するので、毎回ゼロから考えるより計算がずっと軽い。
- 巨大AIは成長するほど計算コストが増えるが、この仕組みは「成長するほど1件あたりのコストが下がる」=逆向き。



概念ドリフトへの動的適応と忘却メカニズム

- ノード間エッジの重みは、脳のシナプス可塑性のように増減する。頻繁に参照される経路は強化され、使われない経路は結合強度が減衰する。
- 減衰した経路は完全に消去されず「休眠状態」として保持され、新しい文脈で必要になれば刺激をきっかけに再活性化される。
- この「忘却」は単なる削除ではなく、ネットワークの可用性を保つための秩序化である。重要なことは強く残り、不要なものは背景に退く。
- 知識ベースの管理責任を人間が負うのではなく、システムが利用履歴と文脈変化から自律的に重みを調整する「生きた知識基盤」となる。

位置づけ：単なる検索精度の改善ではなく、「いま自分にとっての現在」を時間・頻度・関連性の組み合わせで継続的に更新する能力。静的な文章検索を超えた、動的な結合強度の変化として実装される。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

人の脳のように「よく使う知識は強く、使わない知識は薄れる」

- ブロックをつなぐ矢印の重みは、脳のシナプスのように増えたり減ったりする。よく通る道は強化され、使わない道は弱る。
- 弱った道はすぐ消さず「休眠」として残り、必要になればまた目を覚ます（再活性化）。
- この「忘却」は単なる削除ではなく、大事なものを残して全体を使いやすく保つ整理整頓。
- 人が管理しなくても、システムが利用履歴から自分で重みを調整する「生きた知識基盤」になる。

4

第四の設計原理

Cube —— 知能の暗号化カプセル

培われた知能を環境非依存の「固形物」へコンパイルし、所有権を暗号的に保護したまま流通・自己増殖させる「運べる知能の最小単位」。

固形化

暗号防壁

期限付き鍵

フュージョン

系譜ログ

三層独立





固形化と「運べる知能の最小単位」

- ユーザーの対話・実務から形成された入力／出力スキーマ、条件分岐、結合強度、処理経路を、抽象マシン上で実行可能な単位にコンパイルし独立した容器に封じ込める＝「固形化」。
- 従来、ユーザーが構築した知識ベースは特定のデータベース・専用UI・独自APIに強く依存し、他者へ移し替えて機能させることは技術的・ライセンス的に困難だった。
- Cubeはデータダンプでもモデルの重みファイルでもなく、知識・能力・実行可能性が一体化した「運べる知能の最小単位」。
- 内部はHTML / CSS / JavaScriptなどWeb標準技術をベースに、UI・業務フロー・判断支援・知識までを内包する最小実行空間として実装される。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

育てた知識を、箱に詰めて持ち運べる形にする＝Cube

- Cubeは、知識・能力・動く仕組みをまるごと1つのファイルに詰めた箱。「運べる知能の最小単位」。
- ただのデータでもAIの重みファイルでもなく、中にWebの部品(HTML/CSS/JS)も入る。だからボタンを押すと動く小さなアプリごと持ち運べる。
- 従来の知識ベースは特定のDBや専用UI・独自APIに強く依存し、他人に渡して動かすのが難しかった。Cubeはその縛りを外す。



絶対的暗号防壁と「コピー／利用の分離」

- 知識が誰にでもコピー可能なデータとして流通すれば、複製・盗用・改竄の脅威にさらされる。流通を広げるには、粗末な経路を通っても中身が壊れない強靱さが必要。
- 流通の安全性を「経路の信頼性」に依存させないため、Cube 全体を AES-256-GCM または ChaCha20-Poly1305 で暗号化し、Zstandard (zstd) で高圧縮する。
- 設計思想は「隠す」のではなく「読めなくする」こと。正規の鍵を持たない者にとって、Cube は意味をなさないランダムなビット列となる。
- 「コピー可能性」と「利用可能性」を暗号的に分離—— ファイルは誰でも複製できるが、鍵がなければ実行も閲覧もできない。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

コピーは自由。でも「鍵」がないと開けない・使えない

- Cubeは強力な暗号(AES-256など)でロック。鍵がない人には、ただのランダムな数字の列にしか見えない。
- ファイル自体はだれでもコピーOK (USB・メール・SNS)。でも使えるのは鍵を持つ人だけ。
- 「コピーできること」と「使えること」を暗号の力で切り分ける。だからコピーされても怖くない。



期限付き鍵とアクセス権の動的制御

- 暗号化（防壁）だけでは不十分。「誰に・いつから・どの期間・どの条件で使わせるか」という利用権の設計があって初めて、知識流通は経済圏として成熟する。
- 対象の Cube 専用の復号鍵を生成し、「いつからいつまで有効か」という時間制約を暗号学的に組み込む。利用者はファイルを持っていたても、有効期間・条件の範囲内でしか起動できない。
- これにより「期間限定で使わせる」「更新料で延長する」といったライセンス経済をデジタル資産に実装できる。
- 例：税務・法務に精通した業務支援 Cube を、「1 年間のみ有効な復号鍵」とライセンス料を引き換えに提供する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

「いつまで使えるか」を鍵に入れられる＝知識をレンタルできる

- 鍵に有効期限を組み込めるので、ファイルを持っていたても、期間内・条件内でしか動かせない。
- 「1週間だけのツアーガイドCube」「テストの日だけの数学先生Cube」のようにレンタルできる。
- 「期間限定で使わせる」「更新料で延長する」といったライセンス経済を、デジタル資産で実現できる。



自己増殖・合成（フュージョン）と系譜ログ

- Cube は「使われるだけ」でなく「教育される」。移転先で新しい業務に触れ、内部グラフを拡張し続ける —— 育つ知能を配るという設計。
- 合成（フュージョン）：税務に強い Cube が法務業務の中で学習し、両領域を一体化した高度な判断経路へと非線形に進化する。
- 改竄不能な系譜：生成・追加・合成のたびに、操作者の識別情報とタイムスタンプを暗号的ハッシュチェーンとして記録する「系譜ログ」を内部に封印する。
- 履歴は Cube の数学的整合性と不可分。第三者が書き換えれば破損ファイルとして扱われる —— 貢献者への正当な収益還元（第七原理）の技術的基盤となる。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

Cubeは「育つ」「合体する」、そして「だれが育てたか」が永遠に残る

- 渡した後も相手がいながら育て、内部の地図を広げていく＝「育つ知能を配る」。
- 別々のCubeを合体(フュージョン)して、もっと強い新しいCubeを作れる（例:税務＋法務）。
- 作る・育てる・合体のたびに、だれがやったか＋時刻が、改ざんできない記録(系譜ログ)として残る。
- だからCubeが広まってお金が動くと、育てた人みんなに正しく利益を返せる（第七原理＝収益権の土台）。

三層独立アーキテクチャと乗算的進化



システムは直交的に分離された三層から成り、各層が独立に改善される。

③ 自律型エージェント・ランタイム層

Cube のワークフローを解釈し、OS のネイティブ API を実際の行動へ変換する

② 知識・実務トポロジー層 (Cube)

ユーザーが培養し外部化したDAG ネットワークをカプセル化した中間層

① 言語処理エネルギー層

OpenAI API やローカルの OSS LLM など。交換可能な「電力」として供給される

乗算的進化 — ベンダー依存からの脱却

三層が直交的に分離され、Cube は下層モデルのベンダーや世代を前提にしない。知識資産と実行基盤がそれぞれ独立に改善され、「プラットフォーム撤退で全体が死ぬ」脆弱性から脱却する。下層は半導体進化で高速・安価に、中間層はコミュニティの集合知で密度を増し、進化が掛け合わさる。

5

第五の設計原理

P2P (Peer to Peer) トポロジーと 堅牢なアーキテクチャ



認証・時刻・仲介を中央サーバに委ねない。存在の継続権を他者に預けない、自律防衛する分散基盤を物理層から築く。

P2P メッシュ / DHT

Fate-Sharing

時刻の主権 (UTC)

Proof of Malfeasance



メッシュの物理層と到達可能性の確保

- P2P は「全員が常に全員に直接つながる」ことを意味しない。本質は、中央の権威の中継を前提にせず、各ノードが自律的につながり、必要に応じて継ぎ合いながら全体の連続性を保つこと。
- 現実には多くの端末が NAT の背後に隠れ、モバイル回線・企業内 NW・ホテル Wi-Fi など到達性を阻害する要因が無数に存在する。
- 一本の幹線に全交通を集中させず、無数の生活道路や迂回路を持つ都市交通のように、一部の経路が壊れても目的地へたどり着ける——これが P2P の生命線。
- 隣接ノードの到達性・通信品質・遅延・稼働状態を観測し、不安定なら別ルートを探し、回復すれば再接続する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

中央のサーバーをなくし、みんなが「運送屋さん」になる

- P2Pは「全員が常に全員と直接つながる」ことではなく、中央の中継に頼らず各ノードが自律的につながる仕組み。
- 家のルーターの内側は外から直接さわれない問題(NAT)があるが、AさんがCさん経由でBさんに荷物を渡すように、みんなの中継して解決する。
- 太い道1本より、細い道がたくさん。一部がふさがっても、別の道で目的地に届く。



GUI／サーバーの分離と Fate-Sharing

- ローカル PC で強い権限を持つ自律エージェントでは、ノード内部の構造が極めて重要。単一プロセスが画面・通信・認証・API・ファイル・プロセス管理を一体で抱えると、一か所の不具合が全体停止に直結する。
- GUI プロセス（対話・表示・入力）と、バックエンドのサーバープロセス（通信・認証・エージェント実行・タスク管理・ログ・監視）を明確に分離するマルチプロセス構成を採用。
- この分離（Fate-Sharing）により、片方に障害が起きても他方が状態を把握でき、障害の局所化が可能になる。
- 自律型エージェントを「便利だが危ない黒箱」ではなく「強いが統制可能な道具」にとどめるための基礎構造である。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

「画面」と「裏方」を分けて、片方が壊れても全部は止めない

- 強い権限を持つAIが、画面・通信・認証・ファイルを全部1つのかたまりで抱えると、一か所の不具合で全体が止まってしまう。
- そこで画面(GUI)と裏方のサーバーをはっきり分ける(マルチプロセス)。片方が壊れても、もう片方が状況を把握できる＝Fate-Sharing。
- 自律エージェントを「便利だが危ない黒箱」ではなく「強いが統制できる道具」にとどめるための基礎の作り。



時刻の主権と Clock Sync Enforcement

- 暗号鍵の期限、ログの順序、取引の先後、異常検知、アクセス権の有効期間、系譜記録の整合性 —— あらゆる仕組みが「時刻」を土台にしている。
- 時刻を共有することは、秩序を共有すること。中央管理者の不在でシステムを持続させる上で決定的に重要。
- UTC 強制同期 (Clock Sync Enforcement) は「なるべく合わせる」お願いではなく強制であり、時計を改竄する異常ノードを排除・隔離する。
- 誰のローカル時計でもなく、ネットワークの整合性が「現在」を決める「共連現実」を維持する装置 —— 中央サーバなき秩序の背骨となる。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

世界共通の時計をそろえることが、中央なしの「秩序」になる

- 鍵の期限・ログの順番・取引の先後・期限切れ判定…あらゆる仕組みが「時刻」を土台にしている。
- そこで全ノードが世界標準時(UTC)に強くそろえる(強制同期)。「なるべく」ではなく強制で、時計をごまかす異常ノードは排除・隔離する。
- 誰か個人の時計ではなく「ネットワーク全体の整合性」が“現在”を決める。中央サーバーなき秩序の背骨になる。



Proof of Malfeasance と分散的信頼

- 中央の裁定者を置かない以上、不正をどう扱うかが課題となる。Proof of Malfeasance は、不正・悪性挙動を「検証可能な証拠」として公証する考え方。
- 時刻の重大な逸脱、矛盾する署名、整合しない履歴、二重の主張、期限切れ後の不正稼働などを、検証可能な断片として保存・共有する。
- 「あのノードは怪しい」という噂ではなく、可観測な構造違反の公証。秘密裁判にも私刑にも寄らず、証拠が残ることが抑止力となる。
- 信頼の根源はローカルに置き、Web of Trust と Chain of Trust により、暗号的な到達可能性そのものへ信頼を移す。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

ずるをすると、自分の署名で「自分が犯人」だと証拠が残る

- 中央に裁判官を置かないので、不正は「検証できる証拠」として公証する考え方(Proof of Malfeasance)。
- 時刻の大きなずれ・矛盾する署名・つじつまの合わない履歴・二重主張などを、検証できる断片として保存・共有する。
- 「あいつ怪しい」という噂ではなく、目に見える違反の記録。秘密裁判にも私刑にもよらず、証拠が残ること自体が抑止力になる。

6

第六の設計原理

信頼の鎖と現実世界のアイデンティティ



暗号的に整合したノードの世界に、現実世界の責任主体を接続する。匿名性の自由と、実名の責任を両立させる。

シングルトン・ロック

eKYC / 市民権 L1-L3

Proof of Personhood

影分身としての Cube



シングルトン・ロックとシビル攻撃の抑制

- 分散ネットワーク最大の古典的脅威がシビル攻撃——一人の主体が多数の偽装アイデンティティを作り、あたかも多数派であるかのように振る舞う攻撃。
- 完全にオープンな P2P 空間では参加コストが低いほど偽装多数派が生まれやすく、一人で千票を持てるなら、どれほど美しい民主的設計も一瞬で腐ってしまう。
- シングルトン・ロックは、一人による多重化を物理層から抑制する第一関門——「投票所に行く前の入場制限」に相当する。
- 物理制約と社会的認証（eKYC）は組み合わせさせて初めて意味を持つ。「高価だが匿名の多数の人格」も「制約なき大量複製」も防ぐ。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

一人で大量の偽アカウントを作る攻撃(シビル攻撃)を、入口で防ぐ

- 分散ネット最大の古典的な脅威がシビル攻撃＝一人がたくさんの偽の名前を作り、多数派のふりをすること。
- 一人で千票を持てるなら、どんなに美しい民主的な仕組みも一瞬で腐ってしまう。
- シングルトン・ロックは「一人＝一つ」を物理層から縛る第一関門。投票所に入る前の入場制限のようなもの。



中央認証局 eKYC と市民権の階層化

- 公開鍵は「誰が署名したか」を示せても「その背後にいるのは誰か」は示せない。中央認証局（CA）は証明書発行機ではなく、現実と暗号空間の境界に立つ「社会的な翻訳装置」。
- eKYC（electronic Know Your Customer）で現実の責任主体と公開鍵をバインドし、匿名性と実名責任を選択可能にする。
- アイデンティティを暗号学的証明の到達度に応じて L1 / L2 / L3 の三階層に定義する。
- 「参加していること」と「同じ影響力を持つこと」を区別——意思決定への関与や他者への影響力は、引き受けた責任に比例する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

ネットの鍵を「現実の本人」と結び、責任に応じて権限を分ける

- 公開鍵は「だれが署名したか」は示せても「その人が現実のだれか」までは示せない。中央認証局(CA)が現実と暗号世界の境目に立つ「翻訳装置」。
- eKYC＝マイナンバーカード等で現実の責任者と鍵を1対1で結ぶ。匿名と実名責任を選べる。
- 本人確認の強さでL1／L2／L3の3階層に分け、「参加している」ことと「同じ影響力を持つ」ことを区別。重い行動ほど強い本人確認が必要。



Proof of Personhood と影分身としての Cube

- Proof of Personhood（人であることの証明）：行為主体がボット群でも無限複製可能な架空人格でもなく、一意で継続的に責任を負いうる存在であることを確認する仕組み。
- 現実世界の重みを与えられるとき、Cube は単なるソフトウェアではなく、個人が育てた判断様式・価値観・専門性・実務能力を外部空間へ投影する「影分身」に近い存在となる。
- Cube は誰が育て・改良し・署名したかが暗号的に追跡可能であり、「ある主体が社会へ差し出した知的働きの断片」となる。
- 暗号が保証するのは整合性、社会が必要とするのは責任の所在。両者を重ね合わせて初めて、ネットワークは「遊び場」から「社会基盤」へと成長する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

あなたが育てたCubeは、社会で働くあなたの「影分身」

- Proof of Personhood＝行為者がボット群や無限複製の架空人格ではなく、責任を負える一人の人間だと確認する仕組み。
- 現実の重みを与えられると、Cubeはただのソフトではなく、あなたの判断や価値観・専門性を外に映した「影分身」に近い存在になる。
- だれが育て・署名したかが暗号で追える。暗号は「整合性」を、社会は「責任の所在」を保証し、両方そろってネットワークは“遊び場”から“社会基盤”になる。



社会的真正性の獲得と主権の回復

- P2P だけでも、暗号だけでも、本人確認だけでも足りない。物理的制約・eKYC・階層化された市民権・Cube の系譜・Proof of Personhood／Malfeasance が重なって初めて成立する。
- これらが重なるとき、ネットワーク上には無数の「責任を帯びた影分身」が生まれる。
- それらは巨大企業のモデル内部に吸い上げられるのではなく、個人に紐づいたまま社会全体へ波及していく。

これが「知識の民主化」—— すなわち主権の回復：人間の能力が中央へ没収されるのではなく、個人に紐づいたまま価値を生み出す主体となる。知識・能力・収益権・発言権を、再び巨大プラットフォームの側から個人の手へ取り戻す—— これが社会的真正性の獲得であり、主権の回復である。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

ここで暗号の世界と現実の社会がつながり、「主権」が個人に戻る

- P2Pだけ・暗号だけ・本人確認だけでは足りない。物理制約・eKYC・市民権の階層・Cubeの系譜・人であることの証明が重なって初めて成立する。
- 重なると、ネット上に無数の「責任を帯びた影分身」が生まれる。
- それらは巨大企業のモデルに吸い上げられず、個人に紐づいたまま社会へ広がる＝「知識の民主化」、すなわち主権の回復。

AI収益権の大衆分散装置 — 桁の違うインパクト。

最大

25.6兆ドル

(約4,000兆円)

AIが生む潜在的経済効果

約

111兆ドル

(約1京7,500兆円)

世界全体のGDP合計

最大

45.3兆円

2035年のデジタル赤字

本当に重要なのは、その中から生まれる
収益権・利益・知的資産の流れを、
誰が設計するのか。

AIが生み出す収益権は、今のところ 本質的には『法の外』にある。

資本主義空間の中にむき出しで置かれている／まだ制度の名前が付いていない、未定義の領域。

デジタル格差とデジタル貧困

AI時代の成長の裏で、接続・費用・スキルの格差が新たな貧困を生むリスクがあります



世界で依然オフライン

22億人

2025年時点でも、世界の約4人に1人はインターネットを利用できていません

出所：ITU Facts and Figures 2025



5Gカバレッジの格差

84% vs 4%

高所得国では5G人口カバレッジ84%、低所得国では4%にとどまります

出所：ITU Facts and Figures 2025



G20で広がるデジタル貧困

最大5.4億人

2030年までに、G20でデジタル貧困や“ヴァーチャル・スラム”が拡大するリスクがあるとの試算もあります

出所：Deloitte Tohmatsu Consulting（試算）



女性の利用格差

15%低い

低・中所得国では、女性のモバイルインターネット利用率は男性より15%低いと報告されています

出所：GSMA



重要なのは、AIの価値を社会の中心へ流し、デジタル貧困を防ぐ設計です。

インフラ整備・利用料負担の軽減・デジタル教育・包摂的な社会実装が求められます

AIが生み出す莫大なお金を、
大衆分散するための装置を、本気でつくりたい。

AI収益権の大衆分散装置

政治の再分配だけでは実現できない
公益資本主義を、民間側から体現する。

AI爆発で生まれる莫大なお金を、社会の中へ流し直すソリューションをつくる。

ムハマド・ユヌスがグラミン銀行を創設し、マイクロクレジットで
最貧困層の女性に自立の資金を届けたように、
私はAI主権を人々に届け、
お金やチャンスが行き届いていない人に決定権を届ける。

7

第七の設計原理

AI 収益権の還元と二次投票



AI が生む富を少数の資本家から大衆へ分散還元し、意思決定には「熱意の強度」を計量する二次投票を導入する。

AI 収益権の大衆分散

系譜ログ連動の還元

二次投票 (QV)

Trust Market



AI 収益権の大衆分散と「第三の道」

- 従来、AI が生む経済的恩恵は少数の資本家・プラットフォームに偏ってきた。NECO-ASOVI は「AI 収益権の大衆分散装置」として機能する。
- Cube の系譜ログに基づき、育成・貢献した個人への収益権が、ライセンストークンやマイクロペイメントを介して中央仲介者なしに直接還元される（Continuous Revenue Right）。
- Cube は移転先で成長・合成され、元の貢献者へ系譜を通じて継続的に収益が返る。共有すれば奪われるのではなく、共有するほど派生価値の一部が返る構造。
- 「開いて流通するが、権利と収益は保持される」—— オープンソースと専有の二項対立を超える「第三の道」。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

AIが生む富を、一部の大資本ではなく「育てた人みんな」に返す

- これまでAIの利益は少数の資本家・プラットフォームに偏ってきた。ねこあそびは「AI収益権の大衆分散装置」として働く。
- Cubeの系譜ログをもとに、育てた人・貢献した人へ、中央の仲介者なしに直接・継続的に収益が返る(Continuous Revenue Right)。
- 共有すると奪われるのではなく、共有するほど派生価値の一部が返る。「開いて流通するが権利と収益は保持される」＝オープンと専有を超える「第三の道」。

「未定義の領域」に、構造で答えを置く

- AIが収益主体となる時代——エージェントック・コマースは、すでに現実の射程に入っている。
- エージェントAIが自律的に行う取引の効果帰属や責任分配は、現行法では依然として未整理のまま。
- 系譜ログとContinuous Revenue Rightは、誰が・どの貢献で・どれだけ価値を生んだかを暗号的に確定させ、中央仲介者なしに収益を還元する。
- 法が概念を整理する前に、構造として答えを置く。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

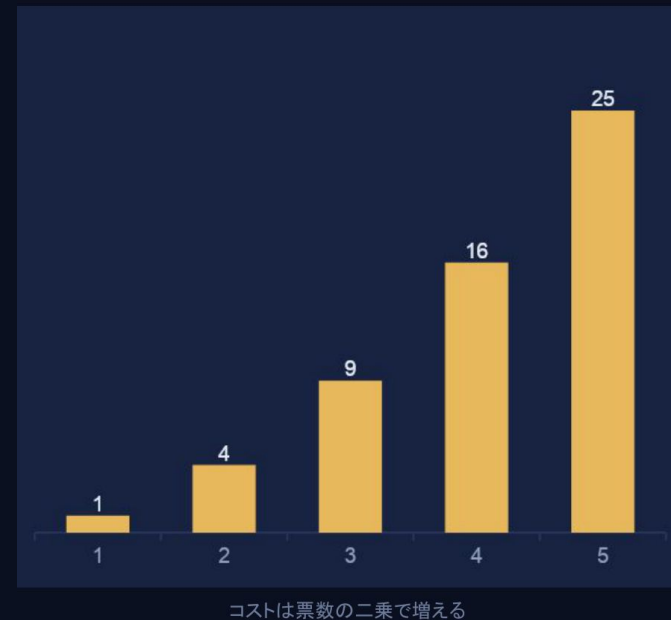
法律が追いつく前に、「仕組み」で答えを先に置く

- AIが自分で取引する時代(エージェントック・コマース)は、もう現実の射程に入っている。
- AIが自律的に行った取引の「効果はだれのもの」「責任はだれが負う」かは、いまの法律ではまだ整理されていない。
- 系譜ログとContinuous Revenue Rightは、だれが・どの貢献で・どれだけ価値を生んだかを暗号で確定し、仲介者なしに収益を返す。
- 法が概念を整理する前に、構造として答えを先に置く。

線形投票の限界と熱意の計量

- 一人一票の線形投票は「軽い多数派の暴力」を生む。本当に重要な課題は、しばしば少数者の切実な必要の中に潜んでいる。
- 二次投票（Quadratic Voting）：強い意思を示したい参加者はより多くのクレジットを投入できるが、コストは票数の二乗で増える（1票=1, 2票=4, 3票=9, 4票=16）。
- 「痛みの深さ」「必要の濃度」を拾い、感情を数学へ変換しつつ、民主主義を平板な多数決から立体的な意思決定へ進化させる。

票数と必要コスト(二次関数)



やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

多数決の弱点を直す。票の値段が「2乗」で上がる二次投票

- 一人一票だと「軽い気もちの多数派」が「切実な少数派」を押しつぶす。本当に大事な問題は、少数の必要に潜むことが多い。
- 二次投票=同じだけ配られたクレジットで票を買えるが、値段は2乗で増える（1票=1, 2票=4, 3票=9, 4票=16）。
- 強く推したい問題には多く使えるが、すぐ尽きる。だから「本気の度合い」が正直に数字で出る。



二次投票による意思決定 — 何を、誰が、どう優先するか

- 二次投票が決めるのは、どの Cube／ワークフローを優先的に可視化・流通させるか、どの分野へ資源を厚く配分するか、どのルール変更を採択するか等の重要な配分判断。
- 「どの課題に、誰が、どれほど本気で資源を割きたいと思っているか」を表面化できる。
- 単純多数決では「広く薄い支持」が勝ちやすいが、二次投票では切実な少数の当事者が高い熱意で票を厚くでき、制度が「痛みの深さ」「必要の濃度」を拾える。
- 投票クレジットは権力の集中ではなく、責任と影響力をより細やかに結び直すための装置である。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

集めた「熱意の地図」で、資源を本当に必要なところへ配る

- 二次投票が決めるのは、どの Cube を優先的に広めるか、どの分野に資源を厚く配るか、どのルール変更を採るか、といった配分の判断。
- 「どの課題に、だれが、どれほど本気で資源を割きたいか」を表に出せる。
- 単純多数決は「広く薄い支持」が勝ちやすいが、二次投票は切実な少数の声を拾える。投票クレジットは権力の集中ではなく、責任と影響力を細かく結び直す道具。



Trust Market と二次投票の抑制条件

- Trust Market: 投票は単なる選挙ではなく「信頼」と「資源」の分散的な市場形成と結びつく。価格ではなく、責任ある主体が信頼と熱意を投じて価値の方向性を形づくる「社会的市場」。

① クレジット配分の公正さ

初期配布・更新・失効の設計が曖昧だと抜け穴を生む

② 理解コスト

数理の説明可能性がなければ不信や無関心を招く

③ 熱意の過剰な集中

狭い利害集団が全体最適を損なう恐れ

抑制 — 多層防御の組み合わせ

二次投票は「熱意を尊重する」制度であって「熱意がある側が常に勝つ」制度ではない。市民権の階層化・ Proof of Malfeasance・履歴の追跡可能性・eKYC・シングルトン・ロックを組み合わせ、制度の穴を単一の仕組みで埋めず多層的に防ぐ。

PART II

自律的エコシステムと社会実装

8つのフェーズによる不可逆な社会実装、限界費用の低下、そして富の再配分へ





8つのフェーズによる社会実装の不可逆化



不可逆性 — 後戻りできない蓄積

各段階が進むごとに、ローカルに蓄積されたトポロジー・署名された Cube・系譜ログなど「ユーザー側に残る資産」が増えていく。多くの新技術が既存プラットフォームに回収される中、この設計は不可逆な社会基盤化へ向かう。



フェーズ戦略の論理 — 販売ファネルではなく社会実装の工程表

- 各フェーズは単なる機能追加ではない。ユーザーの心理的障壁を下げ、導入理由を明確にし、利用頻度を高め、日常業務への依存を生み、その依存をネットワーク参加へ、やがて市場の構造変化へと変えていく連鎖として設計されている。
- これは一直線の販売ファネルではなく、ユーザー・知識・信頼・収益・コミュニティ・制度を段階的に成立させるための前提条件を静かに整える「社会実装の工程表」。
- 壮大な理念ではなく、導入したその日から分かる極めて具体的な利便性から始まる —— 高機能な音声・入力 of 無償提供という「物理環境への静かなる侵入」。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

8つのフェーズは「販売の階段」ではなく「社会実装の工程表」

- 各フェーズは機能追加ではなく、心理的な壁を下げ→使う理由を作り→利用を増やし→依存を生み→ネットワーク参加へ、やがて社会の構造変化へとつなぐ連鎖。
- 一直線の販売ファネルではなく、ユーザー・知識・信頼・収益・コミュニティ・制度が順に成立する前提を、静かに整える工程表。
- 出発点は壮大な理念ではなく、初日から分かる便利さ＝高機能な音声入力の無料提供という「物理環境への静かなる侵入」。



俯瞰的マーケットと限界費用の低下

- 中央集権型の市場は、認証・配信・検索・保管・監査を中央で抱えるため巨大な固定費を運営者が負い、規模拡大とともに支配力も増す（手数料の上昇・一方的な仕様変更）。
- P2P メッシュと単一障害点の排除により、流通・維持コスト（限界費用）を構造的に押し下げ、持続可能性を運営企業から市場参加者の側へ取り戻す。
- 市場は単なる商取引の場を超え、ローカルで育った知能が「市場の単位」となる「俯瞰的マーケット」へと進化する。

含意：限界費用の低下は、特定の運営者が支配力を独占し続ける構造を解体する。市場の便利さが誰か一社の巨大な固定費の回収に依存しない、自律的で持続可能な経済圏が立ち上がる。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

ユーザーが増えるほどコストが下がる「俯瞰マーケット」

- 中央集権の市場は、認証・配信・検索・保管・監査を中央で抱えるため固定費が巨大。規模が増すほど支配力(手数料・一方的な仕様変更)も増す。
- P2Pメッシュと「単一障害点なし」で、流通・維持コスト(限界費用)を構造的に下げ、持続性を運営企業から参加者の側へ取り戻す。
- 市場は単なる商取引の場を超え、ローカルで育った知能が「市場の単位」になる「俯瞰マーケット」へ。便利さが一社の固定費回収に依存しない経済圏が立ち上がる。



富の再配分と「新しい公共圏」

- 価値生成のアーキテクチャそのものを分散型に組み替える —— 国家が税で事後的に再分配する以前の段階で、最初から「集中しにくい構造」を作る。
- Cube の系譜と収益還元により、知識を共有するほど派生価値の一部が貢献者へ返る。「AI が生んだ価値を誰が持つのか」という問いへの回答がここにある。
- 公共性を「国家の専管事項」や「企業の CSR」から切り離し、責任ある市民のノード群の側へ引き戻す —— 巨大プラットフォームの外側に立ち上がる「新しい公共圏」。

最も急進的で、最も実務的な部分：完全な平等を意味しないが、少なくとも「一極集中しか起こらない構造」を壊す。富の創出と分配の構造そのものを、大衆の側へ再配置する。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

富が一極に集まりにくい構造を、最初から作る

- 国が税であとから配り直す前の段階で、価値の生まれ方そのものを分散型にし「集中しにくい構造」を最初から作る。
- Cubeの系譜と収益還元により、知識を共有するほど派生価値の一部が貢献者へ返る。「AIが生んだ価値はだれのものか」への答え。
- 公共性を「国の専管」や「企業のCSR」から切り離し、責任ある市民のノード群の側へ。巨大プラットフォームの外側に立つ「新しい公共圏」。

PART III

国家レベルの Sovereign AI Infrastructure

巨大資本との非対称な戦いを経て、ネットワーク主権時代(Society)へ収束する





巨大資本との非対称な戦い — トポロジーの優位性

- 現在のAIは「スケーリング則（Scaling Laws）」に支配され、巨大IT企業が天文学的な資本・計算資源・電力を投下して巨大モデルを構築している。
- 電力単価・チップ供給・データセンター建設——すべての面で競争条件が異なり、同じ土俵で資本力で対抗することは事実上不可能。
- NECO-ASOVIは最初からこの資本集約的な土俵で戦わない。知能の源泉を巨大モデルのパラメータではなく、ユーザーの日常業務から外部化・蓄積される「階層 DAG トポロジー」に置く。

重心の転換：「どれだけ大きな頭脳（パラメータ）を持っているか」ではなく、「どれだけ濃密なワークフロー構造（トポロジー）を持っているか」へ——資本の戦いを、構造の戦いへとずらす非対称戦略。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

大資本と同じ土俵で戦わない。「頭の大きさ」より「構造の濃さ」

- いまのAIはスケーリング則に支配され、巨大企業が天文学的な資本・計算・電力で巨大モデルを作っている。同じ土俵で資本力勝負は事実上不可能。
- ねこあそびは知能の源を、巨大モデルのパラメータではなく、ユーザーの日常業務から外部化・蓄積される「階層 DAG トポロジー」に置く。
- 「どれだけ大きな頭脳(パラメータ)を持つか」ではなく「どれだけ濃い仕事の構造(トポロジー)を持つか」へ。資本の戦いを構造の戦いにずらす非対称戦略。

ハードウェアの超越と真のネットワーク主権時代



- 私たちは今なお、スクリーンとキーボードに依存する「GUI 前提の世界観」に縛られている。
- 音声インターフェースの普遍性により、その前提を超え、ハードウェアの進化・陳腐化サイクルから解放される。
- 8つのフェーズが一体化したとき、中央集権のブラックボックスに知能を独占される時代は終焉する。
- 人類は巨大資本への隷属から徐々に離れ、自らの手で持続可能な富と進化を生み出し続ける「真のネットワーク主権時代（Society）」へと、不可逆的に歩みを進める。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

8つが一体化した瞬間、「便利な道具」が「社会インフラ」に変わる

- 私たちは今も画面とキーボード前提の世界に縛られているが、音声インターフェースの普遍性はその前提を超え、ハードの進化・陳腐化のサイクルから解放する。
- 8つのフェーズが一体化したとき、中央の「見えない箱」に知能を独占される時代が終わる。
- 水が99℃→100℃で気体になるように、ツールが社会インフラへ「相転移」する不可逆な変化。人類は自分の手で持続可能な富と進化を生む「ネットワーク主権の時代」へ。

PART IV

2つの応用領域

設計原理が社会へ波及する先 — 科学研究の構造的革新と、政治主体の転換(代現士)





科学研究への貢献 — 実行可能な研究知と再現性

従来: 読むものとしての論文

Methods は自然言語で記述されるのみ。データ・コード・判断文脈が分断され、再現には膨大な試行錯誤が必要(再現性の危機)。



NECO-ASOVI: 動かすものへ

研究プロセス全体をトポロジー+ Cube で形式化し、論文をそのまま再演(起動)できる(β Science)。

- 解析手法・前処理・可視化・仮説検証・解釈ロジックを、ファイルの束ではなく実行可能な知識プロセスとして流通させる。
- 再現性を「完全一致」ではなく「差分の可視化」として捉え直し、誰でも再現・改良できる。媒体が「読むもの」から「動かすもの」へ変わる。

国家成長戦略に直結する研究基盤として

- AI for Scienceは、いまや科学政策にとどまらず、国家成長戦略に直結する横断的重点領域となっている。
- 問われているのは、研究の安全性・信頼性・再現性・継続運用性をいかに担保するかである。
- β Science——論文を「読むもの」から「動かすもの」へ転換し、再現性を差分の可視化として捉え直す設計——は、この要請に技術で応える。
- 系譜ログと型付き階層DAGが、「実行可能な研究知」という形で信頼性の裏付けを与える。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

「AI for Science」は、国家成長戦略に直結する重点領域

- AI for Scienceは科学政策にとどまらず、国の成長戦略に直結する横断的な重点テーマになっている。
- 問われているのは、研究の安全性・信頼性・再現性・継続運用をどう担保するか。
- β Science＝論文を「読むもの」から「動かすもの」へ変え、再現性を「完全一致」ではなく「差分の可視化」として捉え直す設計が、これに技術で応える。
- 系譜ログと型付き階層DAGが「実行可能な研究知」として、信頼性を裏づける。



信頼の鎖・知識継承・メタサイエンス

- 科学は信頼の制度でもある。現在の信頼は所属機関・掲載誌・査読に強く依存し、責任の輪郭が曖昧になりがちである。
- 公開鍵・署名・CA・Web of Trust・eKYC・系譜ログを研究共同体へ持ち込み、「誰が・どの責任で・どの貢献を」を技術的に追加する（機関の信頼を否定せず補完する）。
- 知識継承：博士課程の学生が「分野の巨人」の思考経路を実行可能なトポロジーとしてインポートし、その上に自らの研究を積み上げられる。
- メタサイエンスは、科学を外から批評するだけでなく、内側から再設計する工学となる。科学と社会が、同じインフラの上で再接続される。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

科学にも「信頼の鎖」を持ち込み、巨人の思考を引き継ぐ

- 科学は信頼の制度でもある。いまの信頼は所属機関・掲載誌・査読に強く依存し、責任の輪郭が曖昧になりがち。
- 公開鍵・署名・CA・eKYC・系譜ログを研究の世界に持ち込み「だれが・どの責任で・どの貢献を」を技術で足す（機関の信頼を否定せず補う）。
- 知識継承＝博士課程の学生が「分野の巨人」の思考経路を動くトポロジーとして取り込み、その上に自分の研究を積める。
- メタサイエンスは、科学を外から批評するだけでなく、内側から作り直す工学になる。



代議制の限界 — 「議論（議）」から「実装（現）」へ

- 代議制民主主義は、通信・情報共有が希薄だった「高トランザクションコスト環境」に最適化された制度。情報ゲートウェイとして代表を選ぶことに高い合理性があった。
- 情報処理コストが激減した現代、政治の中心は「どの法案を通すか」から「どのプロトコル／インフラを動かすか」へ移りつつある。
- 「文章としての政策」「議論としての政治」と現実の乖離が、民主主義への不信・疲労として現れている。
- 旧来の「議論（議）」を主体とするシステムから、「実装（現）」を主体とする新たなエコシステムへ—— 人類の意思決定プロセスの転換。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

政治も「議論する(議)」から「実装する(現)」へ

- 代議制は、情報のやり取りが難しかった「高コスト時代」に最適化された制度。代表を選ぶことに高い合理性があった。
- 情報処理コストが激減した今、政治の中心は「どの法案を通すか」から「どの仕組み／インフラを動かすか」へ移りつつある。
- 「文章としての政策」と現実のズレが、民主主義への不信・疲労として表れている。議論(議)主体から、実装(現)主体のエコシステムへ。



代現士・公共ファンド・三権分立の補完

- 代現士（だいげんし）：国民の資源を預かり、集約された意思に基づいて現実を変えるプロジェクトを遂行・実装する者。評価は「目的関数の最適化（公共的アウトカムの達成度）」によって冷徹かつ動的に行われる。
- 公共プロジェクトはAI エージェントが実行可能なトポロジーへ変換し Cube として共有。国家予算は固定支出ではなく、インフラ内部の「公共ファンド（プロジェクトへの直接投資）」として再解釈される。
- 三権分立を破壊せず補完する。立法・行政・司法の強制力は奪わず、「公共性の高いプロジェクトの実装と資源の最適配分」を国家外部の自律分散エコシステムとして組織化する自律的な安全弁。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

「代議士」から「代現士」へ。実装で社会を動かす新しい主体

- 代現士＝国民の資源を預かり、まとまった意思に基づいて現実を変えるプロジェクトを実装する人。評価は「公共的な成果をどれだけ達成したか」で冷静かつ動的に行う。
- 公共プロジェクトはAIが実行できるCubeに変換して共有。国家予算は固定の支出ではなく、インフラ内部の「公共ファンド(プロジェクトへの直接投資)」として捉え直す。
- 立法・行政・司法の力は奪わず、「公共性の高い実装と資源配分」を国家の外側の自律分散エコシステムとして組織化する“安全弁”として、三権を補完する。

「議」から「現」へ——制度をエージェントAI前提で再設計する

- いま起きているのは、政府がAIを「道具として導入する」段階から、制度そのものをエージェントAI前提で「再設計する」段階への移行である。
- エージェントAIが契約・申請・発注・移動に主体として関与する以上、本人確認・責任分界・課税・社会保障の諸制度は世界に先駆けて見直されなければならない。
- 「議(議論)から現(実装)へ」「代現土」「公共ファンド」は、この再設計を、行政の内側からだけでなく自律分散エコシステムの側から駆動する補完装置である。
- それは三権分立を破壊せず補完する「国家外部の自律的な安全弁」となる。

やさしい解説 / 中学生でもわかる構想概要

制度を「エージェントAI前提」で作り直す段階に入っている

- いま起きているのは、政府がAIを「道具として導入する」段階から、制度そのものを「エージェントAI前提で再設計する」段階への移行。
- AIが契約・申請・発注・移動に主体として関わる以上、本人確認・責任の分担・課税・社会保障の制度を、世界に先がけて見直す必要がある。
- 「議→現」「代現土」「公共ファンド」は、この再設計を、行政の内側だけでなく自律分散エコシステムの側からも進める補完装置。三権を壊さず補う「国家外部の安全弁」になる。



統合 / SYNTHESIS



7つの原理は一つのインフラへ収束する

自律的エコシステム — 主権の再配置 / 信頼の民主化

統治: AI 収益権の還元・二次投票・Trust Market

信頼: eKYC・市民権 L1-L3・Proof of Personhood

ネットワーク: P2P メッシュ・時刻の主権・Proof of Malfeasance

流通: Cube(固形化・暗号防壁・系譜ログ・フュージョン)

実行基盤: OS on OS・自律エージェント・ランタイム

知能の外部化: 型付き階層DAG + GMR(差分限定推論)

基盤: 言語処理エネルギー(交換可能なLLM)



下 → 上へ
積み上がる

結語 / CONCLUSION

議論(議)から実装(現)へ。 主権が再配置される。

7つの設計原理は独立して働くのではなく、相互に補完し合いながら一つの統合インフラへ収束する。知識の源泉・信頼の流通基盤・価値の分配機構がネットワークの側へ組み替えられたとき、AI インフラの物理的・経済的・政治的な支配構造そのものが書き換わる。

信頼の民主化(Trust Democratized) — これは理想の空想ではなく、すでに実装が始まっている社会実験である。

第 幕

5

なぜ私か — 個人史

私の出発点は、貧しさと暴力の近くにありました。その連鎖を、遠くの社会問題としてではなく、自分の肌で感じてきました。

政治で果たしきれなかった、3つの約束。

①

子ども一人 1,000万円

生まれた家庭の経済状況で子どもの人生が決まりすぎる社会を変えたい。人生の最初から、もっと分厚いチャンス。

②

インターネット投票

海外にいる人、障がいのある人、子育てや介護で外に出にくい人も、当たり前に一票を投じられる社会に。

③

18歳 被選挙権

若い人が、ただ意見を聞かれるだけの存在ではなく、自分たちの決定権で政治に挑戦できる社会に。

政治の思想を、 AI時代の社会実装として

政治で掲げてきたこの思想を、AI時代の社会実装として、もう一度設計し直しているのです。

誰かの『得意なこと』が、
誰かの『困っていること』を助ける。
猫の手でも借りたいあなたへ、AIの手を届ける。
だから、NECO-ASOVI

Networked ECOsystem for Agentic AI SOVereign, In vitro
= エージェント型AI主権のためのネットワーク型エコシステム。

2026年は、その発生器が
現実化する分岐点です。

AI爆発で生まれる莫大なお金を、
人々にダイレクトに流し込むための
AI収益権の大衆分散装置
= 整流器を、本気でつくりたい。

土壌を握るとは、"作る環境を配る"ことではなく、
"勝手に生まれ、勝手に稼ぎ、その富が還る"生態系ごと押さえることです。

■これが、私の世界平和です。

貧困から平和へ — 4つの連鎖。

1 貧困にダイレクトにアプローチする



2 貧困が薄くなれば、追い詰められる人が減る



3 追い詰められる人が減れば、暴力に向かう動機も薄くなる



4 暴力に向かう動機が薄くなれば、世界は少しずつ平和に近づく

これが、今の私にできる世界平和です。

誰がやってもいいってもんじゃない。
全実装の設計図も人も、用意してある。

私が取りに行きたいのは、AIそのものではありません。AIが生む富の流れです。

社会実装を目指す次世代ソリューション構想

仙人のような天才エンジニアと共に、音声・実行・知能・アプリ・信頼基盤を統する

イメージ的には： Aqua Voice × OpenClaw × Claude × App Store × Blockchain

Aqua Voice



自然な音声インターフェース
で誰もが直感的に利用可能

OpenClaw



自律的にツール・デバイスを
操作し、現実世界で実行

Claude



高度な対話・推論・計画で
最適な判断と支援を実現

App Store



多様なアプリ・拡張が集まる
エコシステムで価値を拡張

Blockchain



信頼できる分散台帳で
安全・透明・改ざん耐性を提供

統合プラットフォーム

音声 × 実行 × 知能 × アプリ × 信頼基盤
を一体化

社会実装へ

人々の暮らし・働き方・
社会の仕組みをアップデート

奥の静かな場所で、
テクノロジーの本質を見つめ、
未来を形にする仙人のようなエンジニア。

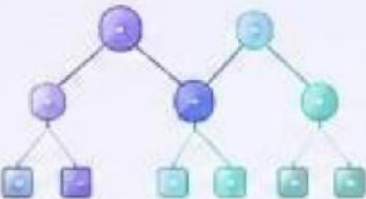
リリース後、ぜひ一度触っていただきたいソリューションです。

型付き階層DAGと熱意モデルによる知的OSの創出

知識・意図・熱意が安全に流通し、価値が循環する知的インフラを構築する



型付き階層DAGとは



知識や業務を「型」で定義し、階層的なDAG構造で関係性を表現。検証可能で再利用性の高い、知的資産の基盤となる。

熱意モデルとは



人の熱意や想いを定量化し、貢献に応じて正しく評価・還元。持続的な知的エコシステムの原動力となる。

目指す未来

誰もが知識と熱意でつながり、共に創り、価値を分かち合う知的OSの社会を実現する。

この際、マジで取りに行く。俺の世界平和に対する本気。

- ◆ あなたの知恵を。
- ◆ あなたの経験を。
- ◆ あなたの技術を。
- ◆ あなたの人脈を。
- ◆ そして、未来を一緒につくる覚悟を。

AIが発生する時代に、世界平和を実装する。その最初の一步を、ここから始めたい。



「人が想像できることは、
人が必ず実現できる」

SFの父・ジュール・ヴェルヌ

たった一度の人生。生まれ方は選べない。
でも生き方と後世に繋ぐものは、
私たち自身が選択できる。

未来の “スタンダード” を創ろう



Think Different

異端であれ
